

# 京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

## 1. 研究課題

「語りえぬもの」を語る行為とその思想表現に関する学際的研究－禅の言葉と翻訳を中心  
課題として－

An Interdisciplinary Study on the Behavior and Expression concerning "What We Cannot  
Speak About" - with a Focus on the Language and Translation of Chan/Zen Buddhism

## 2. 研究代表者氏名

何 燕生

HE, Yansheng

## 3. 研究期間

2022年4月-2025年3月

## 4. 研究目的

グローバル化やAI化が進む現代社会において、そもそも「言葉」と「翻訳」にはどのような意味があるのか。本研究は、「言葉」と「翻訳」という古くて新しい問題を東アジアにおいて形成された禅仏教をケースとして考察することを目的とする。禅は、「不立文字」と言い、言葉を否定的に捉えようとする一方、語録や公案、灯史など膨大な量の言葉群を残している。矛盾にも見える禅と言葉とのこのような関係を一体どのように捉えたらよいのか。「語りえぬものについては沈黙せねばならない」という捉え方があるが、禅では、沈黙だけでなく、時には「道え!道え!」と、語ることも求められる。一方、和語、漢語および近世中国の俗語を駆使して必死に語ろうとしたのは日本の禅僧道元だが、道元による禅の日本語化の持つ意味は一体何なのか。さらに、近代では禅が欧米へと「翻訳」され、英語、フランス語などの言語で語られ、異文化との接触によって脱文脈化しつつある。禅のこうした「越境性」について、またどのような分析枠が可能であろうか。本研究は、これまでの研究を踏まえ、今日的な問題をも視野に入れて、禅の「言葉」と「翻訳」の問題をめぐり、国内外の研究者との連携をはかりながら、学際的に研究するというものである。

Against the backdrop of globalization and evolution of AI in modern society, what is the ultimate significance of "words" and "translations"? In this study, the author focuses on the issue of "words" and "translation" and analyzes examples found in Chan/ Zen Buddhism. The core concept of "No attachment to words" (不立文字) in Chan Buddhism is indicative of a negative attitude toward "words", whereas a voluminous amount of direct quotations from Buddhist monks, koans(公案), and Buddhist lineages are well preserved in documents. To what extent could we understand and explain this paradox? One opinion highlights the fact

that “one must be silence about what cannot be spoken of” (Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen). It is undoubtedly true that silence is emphasized in Chan/Zen Buddhism, yet occasionally a practitioner is also required to “speak”! The Japanese Zen Master Dogen completed very important Japanese works by incorporating Japanese, Chinese and medieval Chinese vernacular terms into his discourse. What is then the role that Dogen played in the Japaneseization of Zen? Since Chan/Zen has been introduced to the West through translations in modern times, Chan/Zen Buddhism in the English and French contexts is being decontextualized along with its contact with different cultures. What is the effective analytic method for the nature of “cross-boundary” in Chan/Zen? In this present interdisciplinary study, the author works with domestic and foreign scholars to address the issue of “words” and “translation” in Chan/Zen Buddhism.

## 5. 研究成果の概要

二〇二二年四月にスタートしたが、当時はまだコロナの規制がまだ緩和されておらず、マスクをつけたままで自己紹介した班員が多かった。そのため、研究会の実施は対面とオンラインというハイブリット形式を余儀なくされたが、海外の班員もリアルタイムでオンラインで参加することができたため、海外在住の班員からの参加や発表、コメントーターでの協力や交流が可能になり、国際色豊かな研究会となった。また、班員の顔ぶれは哲学、言語学、仏教学、日本思想史、比較文化論、翻訳論などの分野から構成され、それぞれの分野からの検討が試みられたことも学際的研究を目指す本研究の趣旨がひとまず達成されたと考える。研究会については、基本的に年に五、六回程度で実施した。毎回の午後の報告会では二発表を設け、それにコメントーター、司会者を配置して行うという学会形式を取った。それにより、三年間で多くの班員がそれぞれいずれかの形で研究会に参加することができた。また、毎年度に研究班の活動の一環として、国内外の学術活動に参加したことも本研究班の大きな実績であったと考える。

研究班の最終成果はこれから報告書、論文集などの形で刊行することになるが、実りの多い三年間であったことを強調しておきたい。

## 6. 共同研究会に関連した主な公表実績

具体的に言うならば、一年目にブリティッシュ・コロンビア大学とイェール大学が共同開催した禅関係の国際シンポジウムで班員六名が発表するとともに、それぞれの論文が英語と中国語に翻訳され、海外の学術誌もくしは論文集に掲載された。二年目には東京外大で開催された日本宗教学会学術大会でパネルを企画し、班員 5 名が発表した。三年目には岩波書店の『思想』(一二〇五号)に「道元の思想」という特集を企画し、班員 11 名が寄稿した。そして、最終年度にあたり、二〇二五年二月十五日に、北白川にある人文研の分館を会場に、「語り得ぬものを語る—グローバル時代の禅の言葉と翻訳」という公開国際シンポジウム

を開催し、海外からの招聘班員、並びに国内の班員を含め、四十名が参加し、議論を交わした。

#### 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

共同研究の成果としては、①論文集である『語り得ぬものを語る—禅の言葉と翻訳の学際的再検討』(仮)という刊行物を 2025 年度内に刊行する予定である。15-18 名の班員による執筆で、研究所の共同研究の成果刊行助成金を申請して、法蔵館から刊行するという計画を進めている。②報告書である『弁道話』の会読の成果を研究所が発行している『東方学報』もしくは『人文学報』に投稿する予定である。